



カナダ、米国図書館訪問記
大学図書館の未来
上原恵美

はじめに

日本の大学図書館で働いている人々の大半は、「図書館学」あるいは「図書館情報学」という一連のカリキュラムを受講し、単位を取得することにより得られる「司書」という資格を持った専門職であるということ、読者のほとんどの方はご存じのことと思います。第二次大戦後の日本の図書館（情報）学は他の分野と同様に米国の影響が大きかったことから、日本の司書たちは図書館（情報）学を学ぶ過程において、実例として（あるいは「お手本」として）の米国の大学図書館の多彩な活動や、それを実行している librarian たちの質の高さとその重要性について、読んだり聞いたりする機会が多くあります。（次ページへ続く）

目次

大学図書館の未来（上原恵美）.....	1	セルフ貸出機を設置しました	11
21世紀は電子図書館の時代（李好根）.....	6	電子ジャーナル総合リスト改訂	11
資料を探して（仲程昌徳）.....	8	DB 検索システムに「聞蔵」登場	11
2003年度貴重書展のご案内.....	10	お知らせ	12

(\前ページより)しかし、現実には日本と米国では教育制度が違うと同様に、大学図書館をめぐる期待や評価にもかなりの違いがあるように思います。これについては様々な要因が考えられますが、その一つには「知をめぐる文化の違い」もあるのではないかと思います。

幸運なことに、私は昨年9月国立大学図書館協議会の海外派遣事業により、カナダ・米国の大学図書館を視察する機会をいただき(視察のテーマは「大学図書館とe-learning」)、異なる図書館文化にふれるチャンスを得ることができました。ここでは、私が実際に見聞きしてきたことについて、ごく簡単にですがお伝えしたいと思います。そして、図書館を利用するみなさんにも、学びの場である大学と大学図書館の未来について考え、想像していただけたらと願っています。

訪問先は、University of British Columbia (Vancouver, Canada 訪問時期 9/18-19)、University of Washington (Seattle, USA 訪問時期 9/23)、University of Hawaii (Honolulu, USA 訪問時期 9/25-26)の各大学図書館です(日程順)。以下、訪問した順に紹介したいと思います。(視察のテーマについて詳細な報告があります¹⁾が、ここではそのテーマとは別に訪問記として書き下ろしました。)

text & photo: 上原恵美 UEHARA, Emi
 附属図書館情報管理課資料情報係。
 主な論文「講習会のネーミング考」(医学図書館, 2000)「琉球大学附属図書館における情報リテラシー教育」(大学図書館研究, 1998)ほか。
 euehara@lib.u-ryukyu.ac.jp

University of British Columbia (UBC)

www.ubc.ca

UBCの図書館は、400万冊余りの蔵書を抱えるカナダ国内でも2番目に大きな研究図書館として知られています。それから北米における日本研究でも著名な大学であることから、東京にある国立国会図書館から日本の政府刊行物が届けられる送付先も、カナダ国内では首都のオタワではなく、UBCのAsian Libraryだけとなっているとのことです。

図書館の中にカフェ?

Main Libraryに入ると、コーヒーの入れ物を持ち歩いている人を見かけました。館内には、コーヒーなどの飲み物と簡単なスナックが購入できるコーナーがあり、図書館で長時間勉強をする人たちの息抜きの場所として機能しているようです。ただし、Food & Drink Policyがちゃんと規定されていて、原則として「閲覧室ではフタ付きの入れ物に入っている飲み物はOK、食べ物はいっさいどこでも禁止、特別コレクションの閲覧時には飲み物食べ物すべて禁止」となっています。ゾーニングによる図書館のアクセシビリティを高め、居心地をよくするための一つの方法として、今後日本の図書館でも取り入れるところが増えるかもしれません。そうするとカフェだけに来る人もいると思いますが、そのうち割



表紙: UW 図書館パソコンルーム。右端にコーヒーカップを持った学生が見える。

かの人は図書館に足が向くことで図書館の魅力を感じるきっかけを掴んでくれるはずですよ。

学びの共有地?

Main Libraryの玄関に入ると、すぐにThe Chapman Learning Commonsという広いパソコンルームがあります。ここには無線LANで接続されたPCが並び、中央にLeaders in Learningと呼ばれる2人の学生スタッフがPCのアプリケーションソフトの使い方から電子ジャーナルや文献データベースの使い方まで、利用者のいろいろな質問に応じています。この部屋の運営は図書館であり、図書館のセールスポイントにもなっていますが、情報処理センターに相当するIT ServicesはCollaborative Partnerとして運営のサポートを担っています。この部屋はパソコンだけでなく小さなソファセットも何組か分散して置かれていて、グループでの小さなミーティングも可能です。図書や雑誌といった文献からだけでなく、コンピュータを利用した学習や、また教官・学生を問わず人同士のコミュニケーションを通じての学習などが組み合わさった「学びの場」としての図書館のあり方を、今一度見直すための好例を見た気がしました。

Librarianは教員!?

カナダや米国のlibrarianは教官の身分であることが一般的であり、UBCのlibrarianも図書館専門職としてだけでなく情報リテラシーに関わる存在として学内でも認知され、また教員としての資質向上のためにもFaculty Development (FD)のトレーニングを受けることもあります。UBCではCenter for Teaching and Academic Growth (TAG)という組織がFDのために機能していますが、librarianはTAGの開催するワークショップに参加したり、またTAGで自分たちのプレゼンテーションを行ったりして、一般の教官との交流や情報交換に努めています。こういう経験の積み重ねによって、一般の教官とlibrarianとの間で教育上でのパートナーシップが育まれるのではないかと思います。

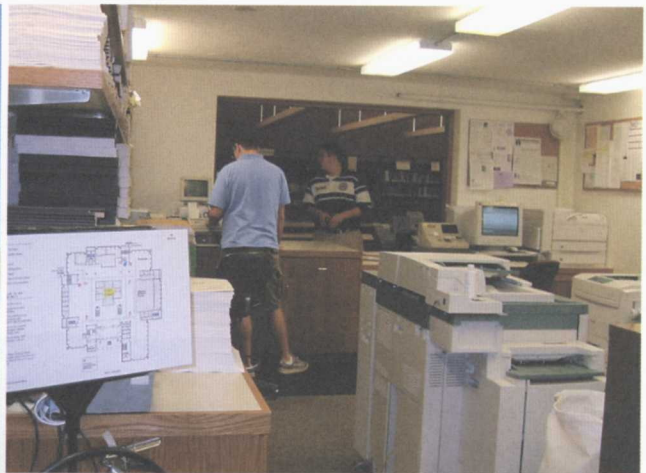
University of Washington (UW)

www.washington.edu

UWのあるシアトルは、最近では野球のシアトル・マリナーズの本拠地として、またスターバックスコーヒーの発祥地として、さらにはコンピュータソフトウェアのマイクロソフト社の所在地としても有名であり、湖が多く自然の美しい街です。UWは創立140年余りの歴史ある大学であり、図書館は600万冊を擁する大規模図書館です。ここでは、図書館の将来、電子図書館時代の到来を予感させる次のようなものを見てきました。

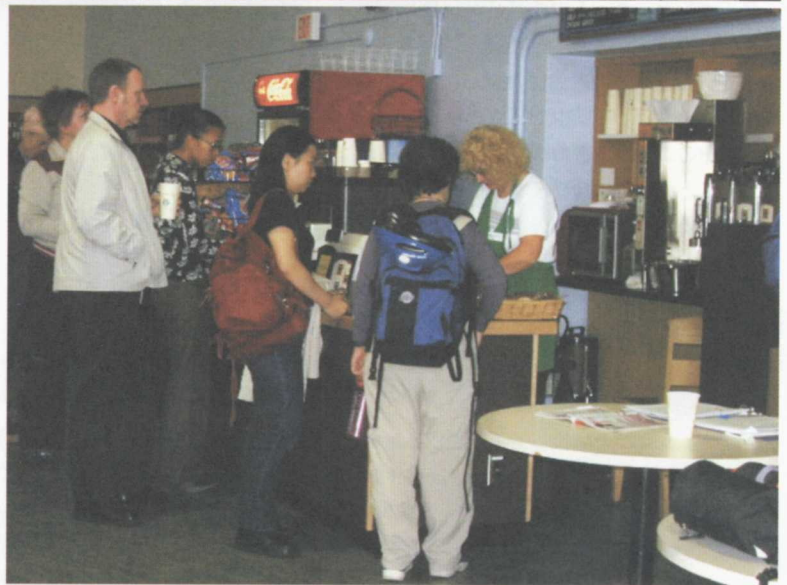
デジタルレファレンス

例えばあるテーマで資料を探している時など、どのようにすればよいかを図書館のカウンターで相談をすることがありますが、このような相談に応じるサービスのことをレファレンスサービスと言います。UW図書館では、このレファレンスサービスをインターネットでも受け付けられるようにしています。電子メールでももちろんですが、UW図書館ではチャットによる質問・回答も可能になっています。チャットによるレファレンスサービスは「Q&A Live」と呼ばれ、東海岸のコネル大学との共同プロジェクトとして2002年1月にサービスが開始されました。このサービスはWebブラウザを用いてチャットが可能になっている他に、あたかもlibrarianが質問者のPC画面をコントロールするかのよう、離れた場所にいる質問者のWebブラウザ上に検索

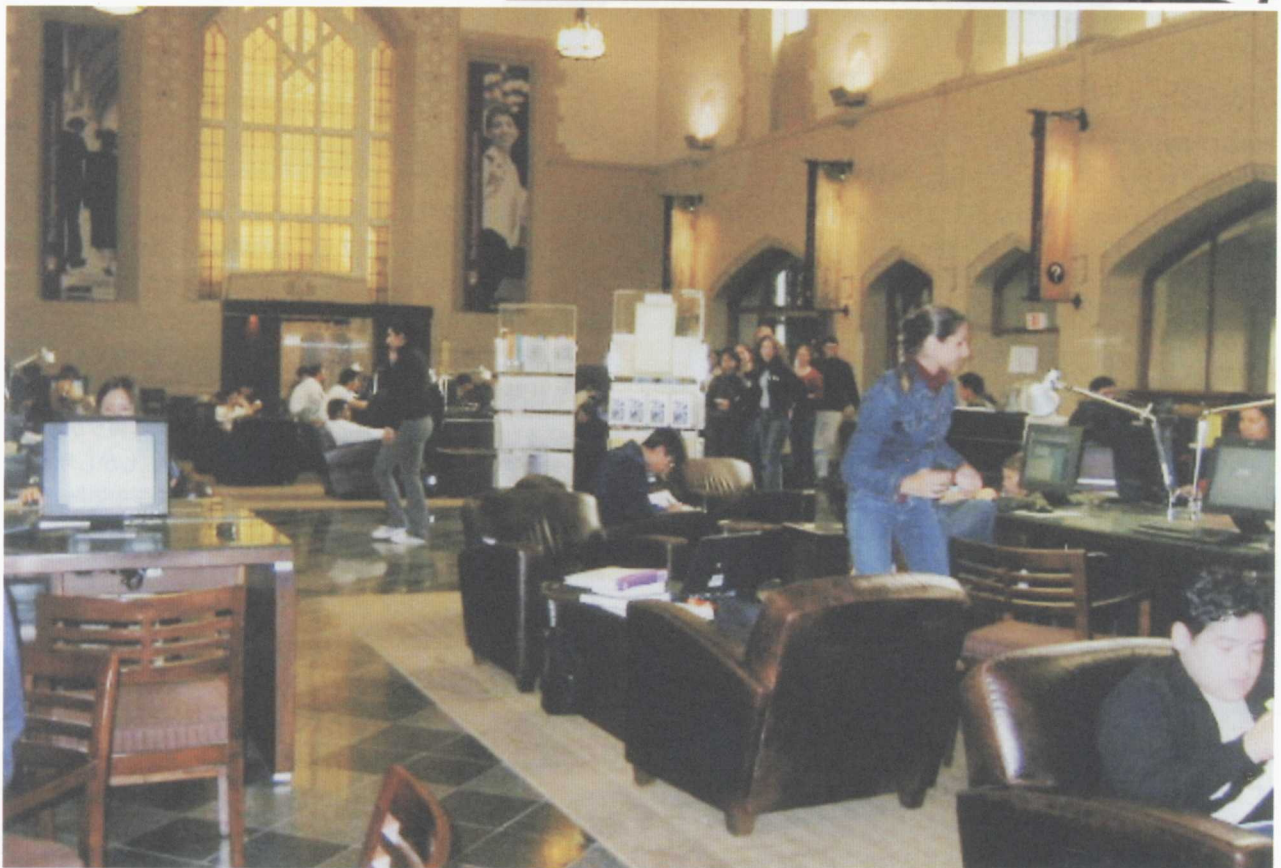


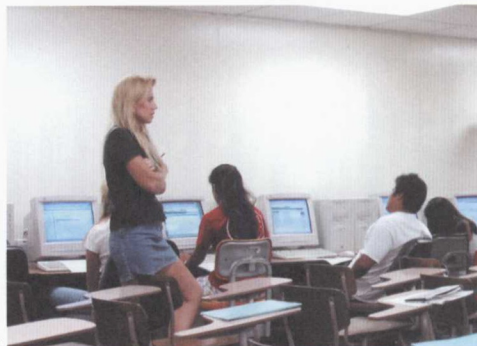
- 1. UW の Suzzallo 図書館
- 2. UW の学部学生図書館コピーセンターの内部
- 3. UBC 図書館内のコーヒーショップ "Pages Cafe"
- 4. UBC 図書館 "The Chapman Learning Commons"

1	2
	3
4	



大学図書館の未来
カナダ・米国図書館訪問記





UH 図書館での LIS100 の授業風景

のキーワードなどを示したりすることが可能になっています。

My Library を作る!?

最近インターネットプロバイダーや Yahoo! などのポータルサイトで、「My ○○」という機能を提供するサイトがあるのに気づいている方も多いと思います。この機能を使うことによって、自分のよく使う情報源にすぐアクセスできるようにしたり、個人が自分のニーズに合わせて選択的に自分だけのポータルサイトを作ることが可能になります。その機能の図書館版が My Library と言われるものです。

UH 図書館の Web サイト上に、「My Gateway」(UH 図書館の Web サイトは「Information Gateway」という名前が付いていることから My Gateway としていると思われる)というサービスが提供されていて、通常は UW から ID が与えられている人が利用できるのですが、お試し版としてゲスト権限で試用してみることができます。これは自分でよく使うインターネット上の情報源をリストすることができる他に、librarian から各分野における基本的なインターネット上の情報源のリストが提供されており、そのリストの更新も行われているようです。

University of Hawaii (UH)

www.hawaii.edu

図書館の情報リテラシー教育とは?

UH 図書館では、librarian が 3 単位を授与する(教官と合同で授業を行う)「Libraries, Scholarship & Technology: LIS100」という授業が行われています。この授業は 2001 年度米国大学図書館協会 (Association of College and Research Libraries: ACRL) の Innovation in Instruction Award を受賞したという実績を持つものであり、日本の大学図書館でも近年情報リテラシー教育における図書館の役割を重要視し推進する傾向にあることから、UH 図書館の訪問を楽しみにしていました。

LIS100 は、他の一般の授業同様シラバスが学生に提示されます。シラバスでは授業の目標が明示されていて、要約すると次のような内容です。「知識の生産場所としての大学の役割、学術情報の構成と知の成り立ち、知識の生産・普及と図書館の果たす役割を理解し、インターネットを始め電子的資料も含めた多様な図書館資料を使ったリサーチ方法、批判的に情報を評価する力を身につける。」

私も経験があるのですが、日本では図書館職員が情報リテラシー教育を支援するという名目で授業を担当させていただくことは 1 コマくらいであり、その限られた時間では学生に図書館を利用したりリサーチ方法を理解してもらい、その後の学習における図書館利用の促進に繋がる内容を盛り込むことは不可能と考えて

いいと思います。もともと、高等学校までの学習体験で調べ学習の経験に乏しい日本の学生に、「なぜ学習する上で図書館を利用しなくてはいけないのか?」という問題意識をまず持つてもらふ必要があるのにも関わらず、それを省略して文献データベースの使い方のみを「トレーニング」することには、学生の学習に対するモチベーションをかき立てるという意味で限界を感じていました。そういう意味で、UH 図書館の LIS100 は改めて情報リテラシー教育の掲げる目標について、また情報リテラシー教育に携わる図書館の役割や図書館職員の資質について再考するきっかけを得たのではないかと思います。

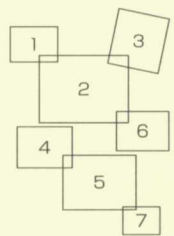
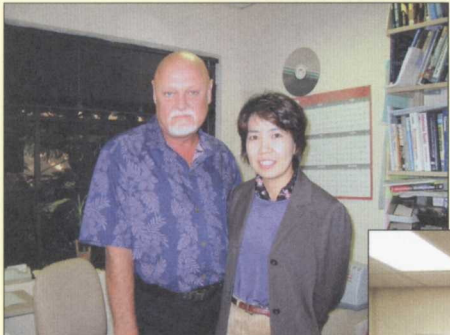
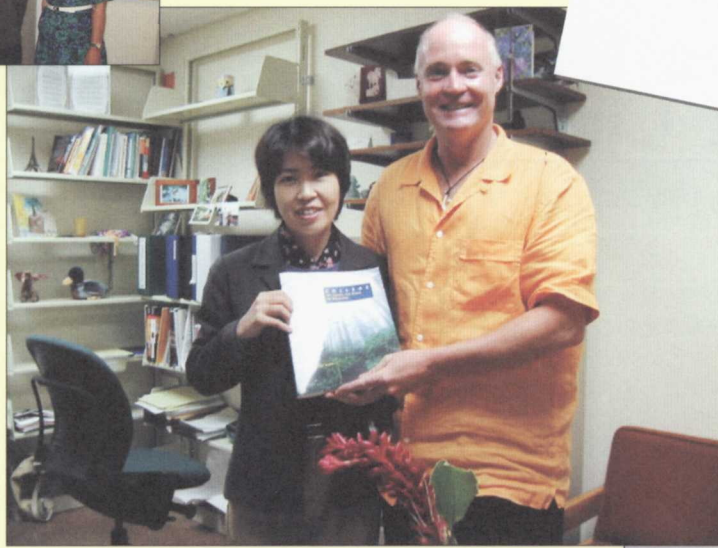
おわりに

ここまで読んでいただいて、どう思われたでしょうか。「お金持ちで人材も豊富な大学だけを見てきたのだから、日本とは比較にはならないさ」と感じられた方もおられるかもしれません。

一般的にカナダや米国の librarian が教官の身分であることについては、何度かふれてきたことですが、確かに日本と違って librarian は最低修士号を持っている必要があります。また同時に図書館職員であっても librarian ではない人も大勢いて、すべてのスタッフで図書館を支えています。このような制度上の違いを根拠に、かの地の大学図書館と librarian の方が優れていると評することは簡単なことですが、もっと根本的なこととして、そういう組織や人材がなぜ必要とされているのかを考える必要があると思うのです。

ただ漠然と「大学には図書館があるのは当たり前」ではなく、かの地の大学では知的生産の場、知的組織としてその社会的な役割を果たす必要性から、大学に librarian という機能を必要とし、組織として大学図書館を抱え整備することになったのではないかと思います。そこが、日本との「知をめぐる文化の違い」の一断面でもあると思います。つまり、例えば国立大学附属図書館の場合、今まで「国立大学設置法」の条文中での法的な縛りがあるがゆえの図書館であり、図書館職員だったのです。しかし今後は、国立大学の法人化を迎えるにあたり、「中期目標・中期計画」を大学毎に設定し、学内組織をそれに沿って改変を余儀なくされる時代が迫っている時期にあって、今回のカナダ・米国の訪問は大学図書館の意義を改めて考えさせられる出来事でした。未来の大学図書館と図書館職員が、本当の意味で「学び」を支える重要な役割を担える組織として努力・発展することを願いつつ、この訪問記を終えたいと思います。

¹⁾ 視察調査の報告は『大学図書館研究』(国公立大学図書館協力委員会編) No.68 に掲載予定。



今回の視察訪問中、お世話になった方々と筆者。

1. UBC の librarian たち、Ms. Whitehead と Ms. Goto と
2. 全米の librarian の中でも情報リテラシー教育で著名な UH の Mr. Hensley と
3. 以前は librarian、今は副学長補佐として活躍中の UH の Ms. Mochida と
4. UH のコミュニケーション学部の Dr. Wedemeyer と
5. UH の LIS100 の受講生と librarian の Ms. Lebbin
6. UH の日本人 librarian、Ms. Bazzelle とアシスタントの日本人留学生
7. UBC の librarian、Ms. Rosseel の素敵なオフィス



大学図書館の未来
カナダ・米国図書館訪問記

The Age of Electric Library

21世紀は電子図書館の時代

1990年代に始まったインターネットの爆発的普及をとともなう電子情報技術の進歩は、21世紀に入ってから

とどまるところを知らない。

これらの技術と、旧来からの情報の宝庫である図書館は、どのような融合を見せるのか。同分野の成長著しい韓国を例に、21世紀の図書館のあり方を展望する。

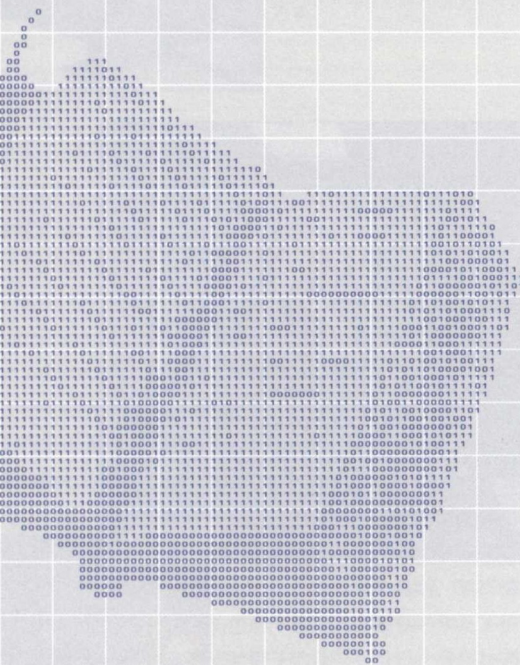
text: 李 好根 Yi, Ho Keun

法文学部総合社会システム学科助教。

主な著作『図でみる沖縄の経済』(共著, 2003)

『はじめての金融経済』(共著, 2002)

『日本の金融経済』(共著, 1995)ほか。



1. 高度情報社会の登場

図書館は、図書、雑誌その他の資料を収集・蓄積し、知識を利用者に提供する役割を果たしています。また、資料に関するさまざまな情報を整備し、資料の探索を援助する仕事も持っています。

1990年代後半に登場した情報通信ネットワークであるインターネットは急速に普及し、知識が流通する仕組みを大きく変えています。我々は自宅のコンピュータからインターネットに接続し、誰もが膨大な電子情報を利用できるようになりました。

今日あらゆる形態の情報の生産、流通、蓄積、処理のすべてのプロセスがアナログからデジタルに移行しています。デジタルの情報は加工、複製、伝送、蓄積、表示の形態がアナログとは異なります。

情報がデジタル化することによって、本や雑誌などのテキスト、音、動画がすべてデジタル情報として一元的に取扱うことができるようになります。図書館もこれらの技術を積極的に活用することにより、図書館の利用を今よりもはるかに便利にすることができます。

2. 電子図書館とは

「電子図書館」とは、このように電子情報と情報環境を活用してサービスを行う図書館のことです。「電子図書館」という言葉には決まった定義はありませんが、主な特徴としては以下のようなものがあります。

- ・ネットワークによる情報の提供
- ・資料にアクセスさせるための書誌情報（二次情報）、電子化した資料そのもの（一次情報）など、さまざまな電子図書館の「蔵書」（コンテンツ）の構築と提供
- ・テキストだけではない音声、動画などマルチメディアの活用
- ・情報通信技術を活用した検索・閲覧等の利便性の向上
- ・インターネット上の情報など外部情報資源の活用と探索への援助

このような電子図書館は、全国的、世界的な情報通信基盤を利用することによって、多様な情報資源へのアクセスを、どこでも、いつでも、だれにでも保障するものとなります。

3. 韓国における遠隔教育と仮想大学の普及

韓国では小中高の学生を対象として、サイバー空間を利用した課外及び学校講義が盛んに行われています。塾などの私設教育機関が運営する学習サイトは全国に数え切れないほどあります。2000年の大学新入生の場合新入生の90%以上がインターネットを使っていることが報告されています。

韓国の学生はサイバー教育の環境で成長して大学に入学するようになってきました。情報化の環境が立ち後れた大学は、このような世代に背中を向けられることになります。学生は大学の遠隔教育に関する関心、特にテキスト中心の教育よりは、動画と連係されたマルチメディア遠隔教育や仮想大学に関する関心が非常に高いようです。

(1) 遠隔教育

韓国の大学が電子図書館の構築に力を入れるようになった直接のきっかけは、遠隔教育や仮想大学の普及です。IT市場分析機関であるKRG (Knowledge Research Group) が、300大学（短期大学含む）を調査して発表した『国内大学遠隔教育導入現況報告書』（2002.4）によると、国内大学の41%がすでに遠隔教育システムを取り入れて教育に活用しており、2%が現在導入中です。未導入の大学も39.2%がすでに導入計画を持っており、21.1%が導入を検討しています。1～2年以内に国内大学の70%以上が遠隔

教育システムを導入・運営することになります。

遠隔教育とは、文字通り遠隔地にいながらにして教育を受ける形態のことです。遠隔教育は、①通信教育 ②CD-ROM 教材配布 ③TV 会議システム利用 ④インターネット利用 WBT (Web-Based Training) というように進化してきています。

また、韓国の大学では受講者が教室に集合し、インターネットや ADSL 通信網などネットワークを経由して教師や教材の画像・音声などを視聴するリアルタイム型の遠隔教育を取り入れながら、授業内容や教材等をあらかじめサーバに蓄積しておき、学生などの受講者はネットワークを経由して自分の都合のよい時間に、自宅や出先など好きな場所からアクセスして受講するオンデマンド型の遠隔教育が中心になっています。

(2) 仮想大学 (サイバー・ユニバーシティ)

サイバー・ユニバーシティ(またはバーチャル・ユニバーシティ)とは、教育活動の大部分を情報通信技術を通じて形成された仮想空間を通じて教育の主体、客体、媒介体と一緒に成り立つ新しい形態の高等教育体制です。現在韓国で認可・運営されている仮想大学は 16 大学で、2003 年度の募集定員は 23,603 名となっています。

このようなサイバー・ユニバーシティは、インターネット上ですべてのものが解決可能でなければならないという前提条件から出発しなければなりません。したがってサイバー・ユニバーシティを構成するためには、授業(教育)システム、行政(教育支援)システム、電子図書館、学習支援およびコミュニケーションのための Collaboration (意思疎通システム)などが必須となります。

4. 韓国における電子図書館の現況

電子図書館をめぐって 1990 年代後半から、アメリカを始めとして世界各国で、さまざまなプロジェクトが行われています。インターネットの急速な発展により、実験段階から実用へ移り、電子図書館は高度情報社会において欠かさない存在となりつつあります。以下では国家電子図書館¹⁾と漢陽大学²⁾の電子図書館の構築を例にして、韓国の電子図書館の現況を覗いてみることにします。

現在韓国では、国家電子図書館によって、国立中央図書館、国会図書館、法院図書館、韓国科学技術院科学図書館、韓国科学技術情報研究院、韓国教育學術情報院、農村進興庁農業科学図書館の 7 機関の資料を統合検索できるようになっています。第 3 次事業 (2001.6.21 ~ 2001.12.20) では、原文を中心にした検索機能提供、ウェブブラウザによる統合検索機能の提供、Z39.50 プロトコルほか、メタ検索機能提供、著作権管理、暗号化、課金・決済システムの構築などが行われました。また、第 4 次事業 (2002.8.3 ~ 2002.12.25) では、視覚障害者用のサイトが構築されました。また、漢陽大学は次のように 3 段階で電子図書館を構築しました。

1 段階構築 (1997.8 ~ 1998.8)

- ・ 書誌情報システム機能拡張
- ・ 多様なフルテキスト検索サービス (Fulcrum Search Server)
- ・ MARC を連係した VOD 試験サービス
- ・ 全世界図書館と連係検索サービス (Z39.50)
- ・ インターネットディレクトリサービスシステム基盤構築

2 段階構築 (1998.9 ~ 1999.8)

- ・ SGML/XML 専門情報システム構築
- ・ MARC を連係した VOD サービスシステム構築
- ・ 全国大学相互貸借システムとオンラインインタフェース
- ・ 専門分野ディレクトリサービスシステム構築
- ・ Campus Knowledge Management System 試験サービス

¹⁾ 国家電子図書館 <http://www.dlibrary.go.kr/>

(視覚障害者用 <http://sigak.nl.go.kr/dl/>)

²⁾ 漢陽大学

<http://www.hanyang.ac.kr/>



国家電子図書館

3 段階構築 (1999.9 ~ 2000.8)

- ・ Campus Knowledge Management System 拡張
- ・ サイバー・ユニバーシティシステムと連動
- ・ 動画検索システム構築
- ・ 自然語検索システム構築
- ・ ウェブ検索エンジン、出版データベースなどと連係

このように情報通信技術の進歩によって、電子図書館は新しい機能やサービスを続々と実現しています。これにより、電子図書館は数千万の情報を対象とした情報の検索、マルチキャスト技術、動画や音を送信するキャスト技術など、従来のテキストと静止画だけの世界から、放送に似たサービスを取り入れています。

ただし、情報通信技術が進歩するにつれて、個人間に必然的に情報格差が生じます。情報格差とは、情報基盤・資源の地域格差、利用者の経済的状況、情報リテラシーの格差などにより、情報要求の表現・充足の点で、個人間に差が生ずることをいいます。電子図書館の実現に当たっては、これらの問題を解決しなければならず、身体障害者の利用などにも十分に注意が払われなければなりません。

おわりに

電子図書館は 1990 年代後半に登場し、長い図書館の歴史の中ではまだ歩き出したばかりです。しかしながら、情報通信技術の革新は情報の生産と提供の方法を変え、それは図書館のあり方に大きな影響を及ぼしています。電子図書館は、高度情報通信社会の中でそのあるべき姿を常に見直しながら、21 世紀に向けた新たな知識・情報の基盤として構築されることとなります。

これから多くの国々で開発中の電子図書館が実用化され、さらに多くの機関・政府・自治体が多様な情報を提供するようになると、我々は、地球上の至る所に分散され、かつそのいずれにもネットワークを介してアクセスできる膨大な情報源を持つこととなります。



旧 館の食堂で昼食を済ませ、表に出たら大雨。止みそうもないので、濡れるのもかまわず飛び出し、新館に向った。入り口でハンカチを取り出そうとして、財布がないことに気がついた。

金がないと困るのはもちろんだが、入館証がないとさらに困ってしまう。大急ぎで食堂まで戻り、座っていた辺りを見ると、大学生の団がいて、何やら打合せをしている風であった。近寄ってテーブルの下をのぞくと、そこに、くたびれかかった財布が転がっていた。ほっとした、といっただけではいらない。何か大きな恵みを受けたに等しい思いがしたのには、自分ながらおかしかった。

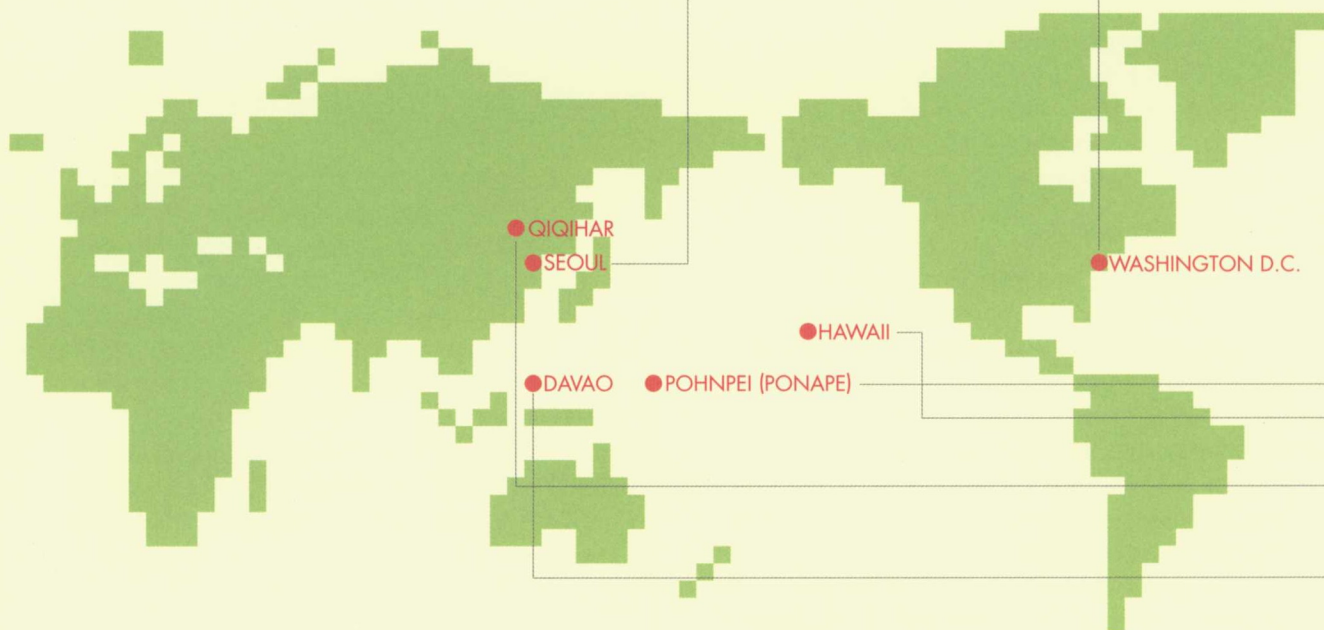
図書館は新館と旧館に分かれ、旧館で入館証を発行してもらい、新館に行って資料を請求するといった手続きだけでも手こずり、館を往復してやっと資料が出てきたところで、昼食時間になっていた。食堂は旧館にあって、食事を済ませ新館に戻ったところで、財布を落としたことに気づき、旧館に舞い戻ったのである。

財布をなくしたのに気づいたとき、青ざめた。それだけに財布が見つかったとき、大声が出そうになった。笑いがこみあげてきたのも当然というものであった。

濡れるのもかまわず、大急ぎで新館に戻った。資料が運び込まれてきて、箱を開けるたびに驚きの連続といった状態が続くが、時々、尻のポケットに手を当てて、財布があるかどうか確かめたのはもちろんである。

ワシントンの議会図書館でのことである。

丸テーブルの上で、借り出した目録をめくっていた。そこへ、たくさんの図書を抱えた年配の方がやってきて、腰を下ろした。時間の早い閲覧室の丸テーブルはどこもかしこも空いていて、わざわざ私たちの座っているところまで来て、本を積み重ねるまでもないのと思っていたら、本の山が崩れて、私たちの足元に散らばった。片付けようとする気配がないので、私たちは、拾い上



text: 仲程昌徳 NAKAHODO, Masanori
法文学部国際言語学科教授。主な著作『沖縄近代短歌の基礎的研究』(2001)『沖縄の文学』(1991)『琉書探究』(1990)ほか。

オキナワ求めて東へ西へ。資料を探す旅すがら、
思いがけず世界中いろんな人たちとの心温まるふれあい、ありました。

資料を探して

looking for OKINAWA in the WORLD



げて彼の前に積んだ。じっと見つめかえしてきただけで無言。こちらも無言で、昼食時間まで何となく居心地が悪く、資料の閲覧どころではなかった。昼食に出て、戻ってきたら、彼はいなくなっていた。

翌日、またまた同じかたちで、彼はたくさんの書物を抱えて、私たちの前に現れた。お互いに無言で、背中がむずがゆくなって資料どころではなくなってきた。昼食時間になって、ほっとして立ち上がろうとしたら、彼も立ち上がり、たどたどしい日本語で「昨日はありがとう」と言ったのである。

なぜか知らないが、目頭が熱くなってきて、しどろもどろになってしまった。

ソウルの韓国国立中央図書館でのことである。

「明日は、講堂も広場も事務室も人で埋まります」と彼女は言った。「人、人、人で足の踏み場もありません。資料を調べるにはあまりいい日ではないと思いますが、それでもよろしかったらどうぞ」という。日にちもないので、よろしく願いますと帰った。

ここ数日すいすいと行けた道路が、その日の朝は車であふれかえりまったく進まない。運転手も諦め顔で、毎年この二、三日はそうだという。やっとの思いで車を降りたところ、昨日までとは打って代わって、まさしく人、人、人であふれかえていた。いつものところに入ったところ、私たちの一角だけを確保してあり、そこには緊急医務室が設置され、看護にあたる方たちが待機していた。

私たちは、恐縮しながら資料をめくり始めた。コーヒーが来る、ケーキが来る、弁当が来るといった状態で、次から次へと差し入れが続き、資料を広げるスペースがあつという間に埋まってしまった。私たちは、日にちがないといって、資料にしがみついている自分たちの野暮さ加減と、人々の温かさを、身にしみて知らされた。

ハワイ沖縄センターのクラフト・フェア初日の資料室でのことである。

私たちの前には、膨大な量の日本語の書物がつまった棚が並んでいた。たまたま隣にいた年配の方から、丁寧な日本語で言葉をかけられて、……と、台湾国立中央図書館分館の日本語資料室でのことを書きかけたのであるが、そのようなことを続けていくということになれば、ハドソン川の流れる近くのビルの中のコロンビア大学図書館でのこと、マリアナ大学の構内にある特別資料室でのこと、グアム大学、ハワイ大学、ソウル大学、チェジュ大学、台湾大学といったような大学の図書館での出来事その喜怒哀楽のいちいちを挙げるということになって、キリがなくなってしまうかねないし、そういうのは誤解されかねないことにもなるので、こころあたりで止めにしておきたいが、「資料を探す」ことに心を奪われるということは、そのどこかで「人に会いたい」ということでもあるかのように思われてもくるのである。

資料を探しに出るのは、人に会いに出るにも似たのがあってはないかと書いて、思い出したことがある。先ほど、こんなことだけを書いていると、誤解されかねないことにもなるといいながら、舌の根も乾かないうちに、また思い出したことがあるとして、「資料」とは関わりのないことについて書くというのはどうかとも思うが、二つだけ、いや三つだけ許していただきたい。

私たちは、島を一巡したあとで昼食をしていた。後ろの食卓では家族四名の話が弾んでいた。入植から子供の出生、成長、戦争の話と続き、島の人の話になったとき、あの時の人たちはどうし

ているのだろう、という娘の問いに、父親は、もういないだろう、この人は短命なのだから、というのを聞いて、私たちはその話に加わった。というのは、私たちを案内している方が、この島の物知りであることで知られている方で、ひょっとするとということ、その件を彼に確かめてみたらどうかと思ったからである。

彼は知っているという。そして、夫は亡くなったが夫人は元気だと思いう。私たち以上に、その家族の胸は弾んだはずである。私たちは日程の調整をして、さっそく彼にその場所への案内をお願いした。小さな家の戸口に、おばあさんと孫らしいのが座っていて、彼は近づいていって挨拶を交わし、私たちを手招きした。私たちは、家族の一行の後ろからついていった。私たちは、そのあとそこで起こった出来事に、ただただ驚くばかりであったが、それは、戸口に座っていた老婆が、家族の母親の名前と、娘の名前を呼んだことから始まったのである。悲鳴が起り、号泣になり、やがて笑いにかわって時間を忘れさせた。昨日まで、自分の住んでいた場所を見つけるために、川を渡り、藪を越え、山林に踏み入り、その痕跡すら消えてしまっていた場所にたたずんでいた家族。あの淋しそうな一家の姿を見ていただけに、私たちも、臉を熱くしたのはいうまでもない。

かつて南洋と呼ばれた島の一つ、ボナベのマトラニュームというところでのことである。

私たちは、飛行機と汽車とバスとを何度も乗り換え、洪水のあとの被害がまだ残る寒村を越えて、小さい村に入った。そこでそれぞれのグループに分かれて、かつて入植していた場所と住んでいた屋敷跡、通っていた学校跡などを訪ねた後、村の人々が歓迎会を開いて下さるとのこと、集会所に集まった。

村の長老たちが正面に座り、私たちはコの字型に並べられた席に座った。一通り紹介が済んだあと、席を立ての歓談になり、入植時代そして引揚げ時の話になった。村の人々は、いったん引揚げていった人々を再び村に呼び戻して、ロシア兵からかかったことに話が及んだとき、村の人が、こういう名前の友だちがいたといっ、その名前を口にした。私たちは、ちょうどその名前を口にしていた人の前にいただけでなく、その名前の人と並んで立っていたのである。二人は、しばらく見詰め合ったあと、抱き合って、頭をこすり合せた。思わず拍手が起って、会場が波立った。そして誰も彼もが抱き合って、それぞれの言葉が、響きあっていた。

旧満州、東北部の子チハル、オニュートでのことである。

私たちは招待を受けていた。どうしようか迷っているところへ案内者がきて、車の準備ができているという。私たちは森の中の道ともいえない道を進んで、車に鈴なりになった不思議な同行者と目当ての家に向った。家の近くまできて、車を降り、歩き出したとたん、年配の方に抱きつかれた。私がびっくりしたのはいうまでもないが、私たちを案内した人によると、彼は私を、叔父さんと間違えたしまったというのである。それほどに私が、彼の叔父さんと似ているというのであった。

ミンダナオ島タバオのバゴ族の住む山奥でのことである。

沖縄関係資料を探すということで、その探索行と資料の所在の有無について書こうとして、おかしなことになってしまった。話の格好をつけなければならないが、長年資料を求めてほつき回っていると、いろいろな付録がついてきて「資料」も厚みをますものになる、といったことで格好をつけたことにしておきたい。



中山王



2003年度貴重書展

名護市立中央図書館で開催



前回の貴重書展の詳細：
<http://www.lib.u-ryukyu.ac.jp/digia/tenji/tenji2002/>

毎年図書館内で行っていた貴重書展を、2001年度、2002年度と2年連続で那覇市リウボウ7階リウボウホールで開催いたしました。いずれも6日間の会期中に約2千人の来場者があり、大きな反響をいただきました。アンケートには、貴重書展の継続を望む好意的なご意見が大多数でした。「戦災をのがれて残った史料がこれだけあるのに驚いた」「なかなか目にする事ができない貴重な史料を拝見できた」「広く県民に鑑賞させてほしい」「中北部・離島でも開催してほしい」などの声があり、沖縄戦等をまぬかれて残った、普段目にする事の出来ない沖縄の史料を、広く公開してほしいというご要望を多数いただきました。

このようなアンケートの結果をふまえ、地方での移動展を検討しておりましたところ、名護市立中央図書館より創立5周年記念事業の一環として協催したいとの要望があり、それを受けて本年度の貴重書展は同館展示ホールにて開催することになりました。詳細につきましては、図書館 Web サイトほか新聞・ラジオ等でお知らせいたします。皆様のお越しを心よりお待ちしております。

場 所： 名護市立中央図書館展示ホール
日 時： 2003年11月11日(火)～16日(日)
平日 10:00～19:00 土日 10:00～17:00
内 容： 2003年2月に那覇市リウボウにて開催した貴重書展の移動展



名護市立中央図書館
〒905-0011 沖縄県名護市宮里5-6-1
TEL: 0980-53-7246
<http://www.rik.ne.jp/nago-library/>

セルフ貸出機を 設置しました

貸出手続が自分で簡単に

医学部分館に引き続き、本館でも5月8日、セルフ貸出機を導入し、サービスカウンター横に設置しました。利用者自身で簡単に貸出手続きができるようになり、プライバシーの保護やカウンターの混雑の解消が図られています。ただし、利用者カードが磁気カードでできていない方や、表紙に図書ID（バーコード）が貼られていない資料は利用できませんので、従来通りカウンターで貸出手続をしてください。比較的新しい図書である閲覧室の図書は、ほぼすべて表紙に図書IDが貼られています。

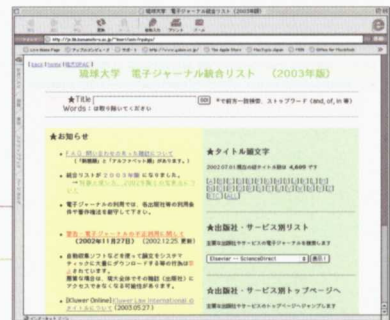


電子ジャーナル 統合リスト改訂

タイトルが検索可能になりました

「電子ジャーナル統合リスト」が改訂されました。新しい2003年版では、電子ジャーナルのリスト表示にプログラムを使用し、タイトル中の単語で電子ジャーナルを検索できるようになりました。また、個々の電子ジャーナルのタイトルをクリックすると、「EJに関する情報」という小さな別ウィンドウが立ち上がり、利用条件やパスワード等の情報が表示されるようになっています。このリストは、九州地区国立大学図書館協議会「電子ジャーナル利用支援WG」活動の一環で運用しています。

電子ジャーナルの使い方について、「電子ジャーナル利用説明会」をリクエストに応じて開催しています。詳しくは図書館 Web サイト「講習会」のページをご覧ください。



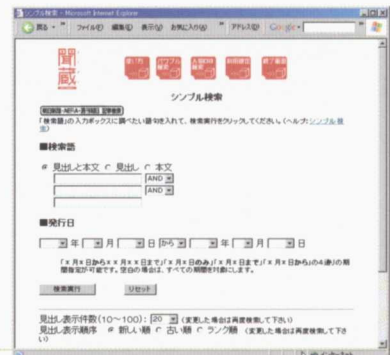
<http://js.lib.kumamoto-u.ac.jp/~lmori/univ/ryukyuu/>

DB 検索システム に「聞蔵」登場

学内のどこからでも朝日新聞が検索できます

朝日新聞記事データベース「^{きくぞう}聞蔵」(DNA for Libraries)は、これまでサービスカウンターの端末のみでの利用でしたが、4月1日より、学内のどこからでも利用できるようになりました。図書館 Web サイト「雑誌論文・記事」のページからアクセスすることができますので、ご利用ください。

ただし同時アクセス数が1つに限られていますので、ほかの方が使用中の場合は、しばらく待ってから再度アクセスしてください。利用が終わりましたら、速やかに正規の手順で終了してください。



お知らせ

開館カレンダー (2003年度)

●本館

8月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

●医分館

8月						
日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

9月						
日	月	火	水	木	金	土
	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30				

10月						
日	月	火	水	木	金	土
			1	2	3	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

11月						
日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30						

開館時間：【黒】 8:30～22:00 【緑】 13:00～20:00 (分館は 13:00～18:00) 【青】 8:30～17:00 【赤】 休館

本館だより

<第 241 回附属図書館運営委員会録>

平成 15 年 5 月 22 日

○協議事項

1. 附属図書館の中期目標・中期計画について
2. 琉球大学における学術情報基盤の整備方策について
3. 附属図書館研究開発室員の推薦について
4. 附属図書館資料選定委員会委員の委嘱について

○報告事項

1. 附属図書館自己評価委員会委員について
2. 科学研究費研究成果公開促進費(データベース)の内定について
3. 破損図書処理について

医分館だより

<第 50 回医学部分館運営委員会録>

平成 15 年 5 月 15 日

○協議事項

1. 医学部分館増築について

○報告事項

1. 平成 15 年度の電子ジャーナルについて
2. 科学研究費補助金報告書の医学部分館配置について
3. 新入生オリエンテーション・看護部オリエンテーションについて
4. シラバス関連図書の整備について
5. 朝日新聞 DNA のサービスについて
6. 自動貸出用図書 ID ラベル貼付作業について

※長期貸出の開始

夏季休業にともない、7月25日から9月23日の間、長期貸出しを行います。返却期限は10月8日となります。長期貸出した資料は、返却期限を延長することはできませんのでご注意ください。

この間に借りた本は **07.25-09.23** この日に返却 **→ 10.08**

■編集後記 / 皆さんは大学図書館にどのようなイメージを抱いておられますか?皆さんの「フツウの図書館」のイメージは、一番身近な図書館のものであると思います。

今回は、皆さんの図書館のイメージをほんの少し広げていただこうと、海外の図書館について特集してみました。皆さんのイメージが変わると、図書館も変わるかもしれません。それは、皆さんの研究環境を変えることにもなると思います。

特集記事の地球儀のアイコンからエコマークを連想して、用紙には「バガスフィールドGA」を使用してみました。これは、サトウキビと古紙から作られた紙です。